

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-20]

保健体育授業の男女共習に対する中学生の認識（教）

男女別の分析

*三谷 林太郎¹、松田 繁樹²、山田 淳子³、出村 友寛⁴ (1. 滋賀大学大学院、2. 龍谷大学、3. 滋賀大学、4. 仁愛大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-21]

「教育の目的」に則した大学体育授業の学修成果指標の作成（心）

大規模私立大学を事例とした検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-22]

体育実技授業がもたらす大学生活への適応と学びの実感（教）

社会情動的スキルの特徴に着目して

*難波 秀行¹、上村 明²、小見山 高明¹、島本 英樹¹、七五三木 聡¹ (1. 大阪大学、2. 和洋女子大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-23]

動作合成・可視化システムを導入したダンス動作学習実験による「動きの理解」に関する検討（教）

*三輪 亜希子¹、中内 悠太²、曾我 麻佐子² (1. 尚美学園大学、2. 龍谷大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 🏢 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-20] 保健体育授業の男女共習に対する中学生の認識（教）
男女別の分析

*三谷 林太郎¹、松田 繁樹²、山田 淳子³、出村 友寛⁴ (1. 滋賀大学大学院、2. 龍谷大学、3. 滋賀大学、4. 仁愛大学)

中学校学習指導要領保健体育編(平成29年告示)では、「体力や技能の程度、性別や障害の有無等に関わらず、運動の楽しみ方を共有することができるように留意する」という共生の視点から、授業を「原則として男女共習で行うこととする」と示された。一方、体育の男女共習授業については、体力・能力の性差の問題や学習意欲および運動技能に及ぼす影響といった課題も指摘されている。男女共習については検討すべきことが多いと考えられるが、ほとんど検討されていない。生徒の男女共習に対する認識についても検討されるべきことのひとつと考えられるが検討されていない。加えて、生徒の男女共習に対する認識は体育や運動に対する好嫌意識や運動の得意・不得意により異なる可能性がある。そこで、本研究では中学校生徒を対象にアンケート調査を実施し、体育に対する好嫌意識、運動に対する好嫌意識、運動の得意不得意が体育の男女共習授業に対する認識に与える影響を明らかにすることを目的とした。対象者は中学1年生286名(男子141名、女子145名)、中学2年生294名(男子150名、女子144名)、中学3年生267名(男子125名、女子142名)であった。希望する授業形態については「完全共習」、「一部共習」、「別習」に分類した。分析の結果、体育の男女共習に対する認識について、男子では運動の得意不得意の違いにより有意差が認められ、運動の得意な生徒は「完全共習」を希望する生徒の割合が有意に多かった。女子では、体育が好きな生徒および運動が好きな生徒は「完全共習」を希望する者の割合が有意に多く、嫌いな生徒は「別習」を希望する者の割合が有意に多かった。また、女子において、運動が得意な生徒は「完全共習」を希望する生徒の割合が有意に多く、不得意な生徒は「別習」を希望する生徒の割合が有意に多かった。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-21] 「教育の目的」に則した大学体育授業の学修成果指標の作成(心)

大規模私立大学を事例とした検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

教養体育科目での運動・スポーツ実践より、様々な学修成果の修得の可能性が示されてきた。大半の学生にとって正課体育授業の受講は最後の機会のため、教養体育授業を一層充実・発展させる意義は極めて大きい。さて、私立大学における教育の鍵は「教育の目的」と考えられる。大学設立の目的や理念を考慮し、建学の精神に則した体育授業が行われ、それに相応しい学修成果が得られれば、体育科目の評価を高められる可能性がある。以上より、本研究では事例的に大規模私立大学における体育授業の学修成果をアセスメントする心理指標を作成し、他指標との関連を検討し特徴を解明することを目的とした。対象者はK大学の教養体育科目を履修した学生であった。調査内容は基本的属性、学修成果の自由記述、「初年次体育授業の主観的恩恵評価尺度(PBS-FYPE：西田他，2016)」、「学校への適応感尺度(大久保，2005)」等であった。調査は令和5年度に対面またはWebにより実施し、適切な回答が得られた1,295名および282名を解析対象とした。まず、自由記述に対してテキスト解析を行い、教育の目的に見合った体育授業での行動や思考等の概念を抽出した。続いて、抽出した概念を基として作成した学修成果に関する項目について探索的因子分析を行った。結果、「教育の目的」に則した3因子(「運動技能のアドバイスと発揮」、「ポジティブ感情の伝達とエール」、「運動の課題解決のための自己開示と傾聴」：各3項目)にて構成される「生涯スポーツLTR尺度(KU-PALTR)」が作成され、尺度の信頼性が確認された。また、運動部所属有無や実施種目の技能レベルによりKU-PALTR因子得点に差異があること、「運動スキル」、「協同プレー」との関連および「居心地の良さの感覚」、「自尊感情」への影響があること等が示唆された。本アセスメント指標の意義や今後の活用等について議論を行う。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-22] 体育実技授業がもたらす大学生活への適応と学びの実感 (教)

社会情動的スキルの特徴に着目して

*難波 秀行¹、上村 明²、小見山 高明¹、島本 英樹¹、七五三木 聡¹ (1. 大阪大学、2. 和洋女子大学)

【背景】心身の健康に関わる行動資質（非認知能力）の醸成が期待されている。体育実技授業が非認知能力に包含される社会情動的スキルや学習への適応感に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は必修体育の受講生239名（女性98名、男性140名）であった。調査期間は2024年後期のPre（2～3回目）、Post（14～15回目）とし、調査は、社会情動的スキルに関する内容（誠実性、グリット、SOC）、学習に関する内容（学校適応感、体育の主観的恩恵、「授業を通じて得られたこと」の自由記述）で構成した。SPSSを用いて各調査について対応のあるt検定により前後比較を行い、クラスター分析を行い各クラスター×前後比較について二要因分散分析を行った。KHCoderを用いて形態素解析を行い同時に出現する語の組合せによる共起ネットワークを作成した。

【結果】前後比較の結果、社会情動的スキルに有意な変化は見られず、学校適応感と主観的恩恵のみ有意な変化($p<0.01$)があった。社会情動的スキルの得点によるクラスター分析から、平均的な「標準群」($n=177$)、グリットに優れた「優群」($n=25$)、大学生活に慣れて欲しい「期待群」($n=37$)の3群が抽出された。すべての群で学校適応感と主観的恩恵が有意に向上し($p<0.01$)、交互作用は確認されなかった。Pre時の学校適応感と主観的恩恵は優群、標準群、期待群の順に高く($p<0.01$)、主観的恩恵は優群が標準群および期待群よりも高かった($p<0.01$)。自由記述では、チームワーク、協力、楽しさといった語が多く抽出された。

【結論】半期の大学体育授業は社会情動的スキルに有意な変化を与えなかったが、初期の社会情動的スキル特性に関係なく、学校適応感と主観的恩恵に有意な向上があり、ポジティブな感情や対人関係を通じて肯定的な影響を与えていることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-23] 動作合成・可視化システムを導入したダンス動作学習実験による「動きの理解」に関する検討（教）

*三輪 亜希子¹、中内 悠太²、曾我 麻佐子² (1. 尚美学園大学、2. 龍谷大学)

本研究では、舞踊の動きについて①インプロヴィゼーションと②ダンステクニックの2つの解釈を採用する。①は可動域や身体部位への探索的メソッドであり、②は各ダンススタイルに根付いた合理的メソッドである（Gretchen・Susan,2008）。そして、動作合成システムBody-part Motion Synthesis System（以下、BMSS）とは、②の特性を活かし、プロダンサーの舞踊動作をモーションデータとして利用し、分析的に解体した短い要素動作（モーションデータ）をタブレット上で合成・置換して新奇な舞踊動作を創出し、3DCGで再生するシステムである。本研究では、BMSS ver4.5.4 Vis（支持基底、重心とZMP、①の特性を活かしたモーションラインを導入した可視化版）を利用した。実験は、ダンサーのトレーニング支援を目的とし、ダンサー9名（21.6±2.98歳）による実演を交えた評価実験とした。結果、提案した可視化手法が身体の使い方の理解に繋がると示唆された（中内ほか,2025）。次に、支持基底と重心を追加した際のBase Motionのカテゴリー別に関しては、Jump、Floor、Acrobaticの3つのカテゴリーが評価された。また、自由記述回答による動きの理解に関するダンサーの評価として、＜身体部位への視点＞、＜空間と動きの関係性＞、＜重心位置＞、＜動きの感覚的理解＞、＜動きの大小＞、＜動きのダイナミックさ＞、＜動きのコーディネーション＞という言葉が顕在化した。これらは「動きの質」（ラバン,1980；ドゥブラー,1974）に関する舞踊の定石的な評価であり、動きへの変換によるアイデアの生成といったダンスの本旨を踏まえると、本実験がダンスのトレーニングとして有効であると示唆される。